

『唐詩選』における送別詩の収録状況： 『唐詩三百首』との比較を通じて

馬 艶艶（岡山大学大学院 社会文化科学研究科）

概要：中国で『唐詩三百首』という唐詩選集が現在でも大流行しているのとは異なり，日本では江戸時代に伝えられた明代末期の『唐詩選』が愛読されており，現在に至っても，重要な唐詩入門書と認められている．なぜ日本と中国では，人気のある唐詩選集に違いがあるのだろうか．それを究明するために，『唐詩三百首』との比較を通して，『唐詩選』の特徴を明らかにしたい．本論文では，まずは送別詩に焦点を絞り，『唐詩類苑』に基づきながら詩の主題を分類し，『唐詩三百首』と比較することで，『唐詩選』における送別詩の収録状況を統計的に調査することにした．

キーワード：漢詩，『唐詩選』，『唐詩三百首』，送別詩

Recording status of farewell poems in "an Anthology of Tang Poems": Throughout comparison with "300 Tang poems"

Yanyan Ma (Graduate School of Humanities and Social Sciences, Okayama University)

Abstract: Readers from China and Japan tend to pick up different classic books on Tang poems. Chinese people have been reading "300 Tang poems" as their first choice since it was created in the Qing Dynasty, making the book still popular in Modern China. While "an Anthology of Tang Poems", another classic work of literary creation in the Ming Dynasty spread to Japan in the Edo period from China, has been more popular among Japanese readers. It was recognized as the most important introduction to Tang poetry since it landed in Japan. Focusing on the farewell poems in "an Anthology of Tang Poems" and "300 Tang poems", this paper clarifies the different preferences between Japanese and Chinese.

Keywords: Chinese poetry, An Anthology of Tang Poems (by Li Panlong), 300 Tang poems, farewell poems

1. はじめに

漢詩を含む漢文学は日本に伝来してから長い歴史を持ち，多くの日本人に親しまれてきた．奈良時代に『王勃集』，平安前期に『白氏文集』が流行した[1]ことから，日本においては同時代の中国で流行していた新しい漢詩集が早い段階で伝来する傾向があったことが分かる．しかし，中国で『唐詩三百首』[2]という唐詩選集が現在でも大流行しているのとは異なり，日本では江戸時代に伝えられた明代末期の『唐詩選』[3]が愛読されており，現在に至っても，重要な唐詩入門書と認められている．なぜ日本と中国では，人気のある唐詩選集に違いがあるのだろうか．それを究明するために，『唐詩三百首』との比較を通して，『唐詩選』の特徴を明らかにしたい．

日本における『唐詩選』流行の要因に関する研究は，これまで様々な視点から行われてきた．流行の要因として挙げられているのは，①『唐詩選』が和刻される前に，『唐詩選』の内容を元に編纂され，流行していた『唐詩訓解』の貢献，②他の唐詩選集より優れた詩を収録していること，③荻生徂徠・服部南郭ら古文辞派の評釈・校訂等の活

動による奨励，④印刷業の繁栄，⑤江戸時代の知識人層の拡大という五つである．そのうち②以外の要因は，外的要因といえる．②だけは『唐詩選』の内容に要因を求めており，詩体，詩人，作成時期，主題等を他の唐詩選集と比較しながら考察した結果である．

前野直彬氏は『唐詩選』に収録された詩の主題について，「懷古・送別・旅愁の詩ばかり選びすぎたことは昔から言われている批判である」[4]と述べている．また，日野龍夫氏によって，『唐詩選』には惜別・辺愁・閨怨等の悲哀を詠じた作品が多く，日本人の心情に訴える[5]と指摘されている．一方，大川忠三氏の指摘によれば，『唐詩三百首』は，内容の面から見ると，詠懷・辺塞・送別・懷古・紀行・詠物・登高・艷情などいろいろなテーマの詩が幅広く取り上げられている[6]．

しかし，三つの先行研究において指摘された懷古・送別・旅愁といった主題については，どのように基準を決めて分類しているかがきちんと説明されていない．たとえば，『唐詩選』が惜別・辺愁・閨怨等の悲哀を詠じた作品に富むという日野氏の指摘に対して，『唐詩選』収録詩の主題の割合を確認する研究は行われていない．

そこで本論文では、まずは送別の詩に焦点を絞り、『唐詩類苑』[7]に基づきながら詩の主題を分類し、『唐詩三百首』と比較することで、『唐詩選』における送別の詩の収録状況を統計することにした。それから、先行研究に指摘されたように、『唐詩選』は本当に送別の詩に富むのか、それが江戸時代における『唐詩選』の流行と何か関係があるかについて考察を行いたい。

2. 主題の比較

『唐詩類苑』は、明代の万暦（1573–1620 年）の時点で、集め得た限りの唐詩を主題によって分類した唐詩の全集である。『唐詩選』と『唐詩三百首』のほとんどの詩が収録されているため、二つの選本に収録された詩の主題を把握するのに適していることから、本論文では『唐詩類苑』を参照することとした。

『唐詩選』収録詩 465 首のうち、435 首が『唐詩類苑』にも収録されており、30 首は収録されていない。一方、『唐詩三百首』は 321 首のうち、298 首が『唐詩類苑』にも収録されており、23 首は収録されていない。今回は『唐詩類苑』に収録されていない詩を除外し、『唐詩選』の 435 首、『唐詩三百首』の 298 首を分析の対象とする。

『唐詩類苑』においては、詩の主題は“部”に分けられ、部はさらに“類”と呼ばれる小項目に分けられる。具体的には、人部、天部、歳時部、地部、山部、水部、京都部など計 39 部に主題が分けられ、人部にはさらに 94 類の小項目がある。

『唐詩選』収録の 435 首は全部で 31 部に分けられ、『唐詩三百首』は全部で 28 部に分けられる。詳細を下記の表 1 に示す。

表 1 『唐詩選』と『唐詩三百首』の主題の各部別比較

		唐詩選	唐詩三百首
	部名	詩数	詩数
1	人部	133	129
2	歳時部	42	22
3	居處部	39	27
4	邊塞部	27	12
5	水部	21	12
6	寺觀部	18	6
7	職官部	18	6
8	武部	17	4
9	樂部	16	13

10	禮部	16	6
11	地部	13	6
12	天部	10	14
13	山部	8	8
14	治政部	8	1
15	京都部	6	0
16	州郡部	6	2
17	帝戚部	5	0
18	花部	4	4
19	巧藝部	4	3
20	服食部	4	2
21	鳥部	3	1
22	獸部	3	0
23	祠廟部	3	3
24	木部	2	1
25	釋部	2	5
26	果部	2	0
27	器用部	1	0
28	草部	1	2
29	道部	1	1
30	文部	1	4
31	産業部	1	0
32	蟲豸部	0	2
33	帝王部	0	1
34	産業部	0	1
	合計	435	298

表 1 から、『唐詩選』においても、『唐詩三百首』においても、詩数と比率が一番多い部は人部であることが分かった。

3. 『唐詩類苑』における送別詩に関連する類別

ここで、本稿における送別詩の定義について述べる。先行研究では、どのような詩が送別詩であるかが明らかでなかった。そこで、送別詩に関連しそうな『唐詩類苑』の分類について調べた。“送”もしくは“別”を含むのは人部の“送”・“別”・“送別”・“留別”・“贈別”・“話別”・“酬

別”・“寄別”・“宴別”の10類であった。これらに分類される詩が送別詩であると仮定する。

『唐詩類苑』において、人部の“送”類は全部で494首あり、詩題が「送+人」になっているのは477首である。詩題が「古相送」、「餞遠」、「送遠」などになっている詩もあるが、詩題に“送”が含まれる詩が多く、旅立つ人を送る時に作られた詩であることが共通する。

“別”は全部で202首あり、詩題が「別+人」になっているのは146首である。例外は、「古別離」、「生別離」、「久別離」、「離会曲」、「欲別」、「惜別」などだが、人部の“別”に分類されている詩の共通点は、詩題に“別”が含まれる詩が多いことと、内容はいずれもどこかへ旅立つ人と別れる際に作られた詩であることである。

“送別”は全部で68首あり、詩題が「送別」であるのは32首である。共通点は、詩題に「送別」が含まれる詩が多いことと、どこで誰かと別れる際に作られた詩であることである。

“留別”は全部で78首あり、詩題に「留別」が含まれるのは75首である。共通点は、詩題に「留別」が含まれる詩が多いことと、旅立つ人が残る者に送った詩であることである。

“贈別”は全部で57首あり、詩題に「贈別」が含まれるのは51首である。共通点は、詩題に「贈別」が含まれる詩が多いことと、別れる際に贈った詩であることである。

『唐詩類苑』において、人部の“話別”・“酬別”・“寄別”・“宴別”が比較的少ない。“話別”は全部で9首、“酬別”が15首、“寄別”が12首、“宴別”が15首である。『唐詩選』にも『唐詩三百首』にも該当する詩がなかったことから、今回は考察の対象としなかったが、“話別”は、別れる前に詠まれた詩が分類されている。“酬別”は、詩をもらったお礼に返した詩である。“宴別”は、離別の際に設けられた宴席で作られた詩である。

以上より、送別詩と仮定した『唐詩類苑』の10類の詩の共通点をまとめる。作詩者は送る側と旅立つ側に分かれ、場面は宴席などに分けられるが、詩題にその類別名が含まれることと、離別の際に作られた詩であることが共通点である。本論文では、送る側と送られる側、送別の場面などで分けることなく、離別の際に作られた詩をすべて送別詩と定義し、統計的な調査を行うこととする。『唐詩選』と『唐詩三百首』の人部について、類ごとに詩の数を調べると表2のようになる。

表2 『唐詩選』と『唐詩三百首』の人部の各類別比較

		唐詩選	唐詩三百首
	類名	詩数	詩数
1	行役	14	9

2	送	13	6
3	閨情	13	24
4	幽怨	10	7
5	懷古	8	12
6	別	7	4
7	貶謫	7	1
8	俠少	7	1
9	感慨	5	1
10	宴集	4	0
11	答	4	1
12	會遇	4	6
13	贈	3	0
14	還鄉	3	2
15	交遊	3	1
16	眺望	3	2
17	感遇	2	4
18	寄	2	4
19	美人	2	2
20	羈旅	2	3
21	隱逸	2	2
22	閒適	2	1
23	感舊	1	0
24	姻戚	1	0
25	寓宿	1	1
26	行樂	1	0
27	山中	1	0
28	事宿	1	0
29	尋訪	1	4
30	述懷	1	0
31	送別	1	2
32	罷官	1	0
33	參謁	1	0
34	懷思	1	3
35	醉	1	0

36	哀傷	0	4
37	難危	0	4
38	夢	0	3
39	兄弟	0	2
40	贈別	0	2
41	女	0	1
42	宗族	0	1
43	喜幸	0	1
44	賢媛	0	1
45	侍候	0	1
46	示喻	0	1
47	時事	0	1
48	貧窮	0	1
49	問訊	0	1
50	留別	0	1
51	獻詩	0	1
	合計	133	129

送別詩に該当するのは、『唐詩選』においては“送”・“別”・“送別”の3つの類、『唐詩三百首』においては“送”・“別”・“送別”・“贈別”・“留別”の5つの類である。『唐詩選』と『唐詩三百首』に含まれる送別詩の割合を表3に示す。

表3 送別詩の割合

	類名	唐詩選		唐詩三百首	
		詩数	%	詩数	%
1	送	13	2.99	6	2.01
2	別	7	1.61	4	1.34
3	送別	1	0.23	2	0.67
4	贈別	0		2	0.67
5	留別	0		1	0.34
	合計	21	4.83	15	5.03

比率から見ると、『唐詩選』において人部“送”・“別”・“送別”に分類される詩は全部で21首あり、『唐詩選』の435首の4.83%を占めている

のに対して、『唐詩三百首』において“送”・“別”・“送別”・“贈別”・“留別”に分類される詩は全部で15首あり、『唐詩三百首』の298首の5.03%を占めている。

4. 考察

『唐詩選』において、人部“送”に分類される詩を1つ挙げてみる。

- 常建「送宇文六」（『唐詩選』374）[11]

花映垂楊漢水清
微風林裏一枝輕
即今江北還如此
愁殺江南離別情

（現代語訳）

紅の花は、枝垂れた柳の緑に映えて漢水の流れは清い。そよ吹く風が林間をわたると、一枝の花が軽く揺らぐ。今や江北も、やはりこのような春色なのだろうが、君と別れて一人江南に留まる私の心は、まさに堪えがたい思いがするのだ。

この詩の詩題は「送宇文六」であり、宇文六という人物を送る場面を詠じたものである。「送宇文六」のように、『唐詩選』において“送”に分類されるのは、「芙蓉樓送辛漸」を含め、「送遠」・「送李回」・「夜送趙縱」・「送朱大入秦」・「送司馬道士遊天臺」・「送薛大赴安陸」・「送別魏三」・「送韋諷事」・「送李侍郎赴常州」・「送宇文六」・「送杜十四之江南」・「送魏十六還蘇州」・「送客知鄂州」・「送劉侍郎」・「送盧起居」の計16首である。『唐詩三百首』においては、「送陳章甫」・「奉濟驛重送嚴公四韻」・「送李端」・「送人東遊」・「芙蓉樓送辛漸」・「渭城曲」（「送元二使安西」ともいう）の計6首である。人部“送”に分類されている詩は詩題がほぼ「送+人」となっており、いずれも旅立つ人を送る時に作られた詩であり、題名にも“送”の字が含まれている。

次に、『唐詩選』において、人部“別”に分類される詩を1つ挙げてみる。

- 王昌齡「盧溪別入」（『唐詩選』342）

武陵溪口駐扁舟
溪水隨君向北流
行到荊門上三峽
莫將孤月對猿愁

（現代語訳）

武陵溪の入り口に小舟をとめて別れを惜しめば、川の水は君に随って北に向かって流れてゆく。

君はこれから荊門に至り、それから更に三峡をのぼるときは、さびしい一輪の月をながめつつ、悲しい猿のなき声をきいてはいけない。きけば旅の愁えに堪えないであろうから。

この詩は王昌齡が盧溪という川のほとりで旅ゆく人を送った時の詩だという。

“別”に分類されるのは、『唐詩選』においては、「送別」（王維作）・「夜別韋司士」・「古別離」（孟郊作）・「重別李評事」・「別董大」・「古別離」（韋莊作）の計 7 首である。『唐詩三百首』においては、「送別」（王維作）・「至德二載甫自金光門出，閒道歸鳳翔。乾元初從左拾遺移華州掾，與親故別，因出此門，有悲往事」・「喜見外弟又言別」・「江州重別薛六柳八二員外」・「送別」（王維作）の計 5 首である。いずれも友人との送別の際に作られた詩であり、詩題に“別”が含まれる。「送別」（三首とも王維作）だけが詩題に“送”も含まれているが，“別”に分類されている。

『唐詩選』において、人部“送別”に分類される詩を 1 つ挙げてみる。

- 皇甫冉「曾山送別」（『唐詩選』399）
淒淒遊子苦飄蓬
明月清樽祇暫同
南望千山如黛色
愁君客路在其中

（現代語訳）

さびしい旅の子の君は、風に吹かれるよもぎのような、所定めぬ身の境遇になやんでいる。せめて今宵明月のともに、しばらく共に酒を汲もう。南のかたを望めば、山々が幾重にも重なって、黛色に霞んでいるが、明日は君のゆく旅路が、その中にあるのだらうと、私の心は愁に沈みがちである。

人部の“送別”に分類される詩に関しては、『唐詩選』においては「曾山送別」の 1 首のみであり、作者の皇甫冉が曾山で別れる友人を見送った時に詠んだものである。『唐詩三百首』においては、「餞別王十一南遊」と「送崔九」の 2 首である。いずれも友人を送別する際に作られた詩である。詩題に“送別”が含まれているのは「曾山送別」だけだが、「送崔九」の題名は「留別王維」とも言う。「留別」を題名に含む「留別王維」も、“餞別”を題名に含む「餞別王十一南遊」も離別の際に作られた詩で、詩題に“送別”が含まれないが、人部“送別”に分類されている。

それから、『唐詩選』にはないが、『唐詩三百首』に収録されている“贈別”と“留別”の具体例を出す。

まず“贈別”の例を挙げる。『唐詩三百首』においては、「贈別其一」と「贈別其二」がある。いずれも詩人の杜牧が官僚として勤務した揚州で、歌妓と別れた際に作った詩であるという。

- 杜牧「贈別」（『唐詩三百首』296）
娉娉嫋嫋十三餘
豆蔻梢頭二月初
春風十里揚州路
卷上珠簾總不如

（現代語訳）

しなやかに美しい、年は十三を越えたばかり。二月の初め、梢にほころぶ豆蔻の花か。春風に揚州十里の街々の、巻き上るすだれの内に、かい間見る美しい人たちも、みなこの君に及びもつかぬ。

次に“留別”の例を挙げる。『唐詩三百首』においては孟浩然の「留別王維」がある。

- 孟浩然「留別王維」（『唐詩三百首』132）
寂寂竟何待
朝朝空自歸
欲尋芳草去
惜與故人違
當路誰相假
知音世所稀
祇應守寂寞
還掩故園扉

（現代語訳）

わびしやわれ、なにを待つとてあてもなく、日々空しく帰り来る。芳草を尋ねてとおく去ってゆこうと思いつつも、友と別れる名残惜しさ。当路の人と誰とて力を貸すものなく、わが心を知るひと稀。今はただ寂寞に堪えて、故園の門を閉じて暮らそう。

この詩の背景として、孟浩然是出世しようと思いい、科挙試験を受けたが、及第ができなかったという出来事がある。才能を知ってくれる者もおらず、自分の性格も世間に向かないことを知り、再び故郷を帰ろうとした際に、親友の王維に書いた詩である。

以上から人部の“送”・“別”・“送別”・“贈別”・“留別”の分類基準をまとめると、内容はいずれも送別の詩であり、詩題に“送”・“別”・“送別”・“贈別”・“留別”が含まれているかによって分類されている傾向がみられる。『唐詩選』と『唐詩三百首』の詩の実例について分析すると、類はそれぞれ

であるが、いずれも離別にあたって作られた詩であった。

今後は、懷古・旅愁・閨怨・辺塞の詩についても、引き続き調査し、『唐詩選』に収録された詩の各主題の割合を明らかにしていきたい。今回比較した『唐詩三百首』のほか、『三体詩』、『瀛奎律髓』、『古文真宝』など他の唐詩選集と比較することで、『唐詩選』の人気の要因を追究していくつもりである。

参考文献

- [1] 水田紀久, 頼惟勤(編). 日本漢学. 大修館書店, 1968, pp.4-6.
- [2] 蘅塘退士(編). 目加田誠(訳注). 唐詩三百首. 平凡社, 1973-1975.
- [3] 目加田誠(著). 唐詩選. 明治書院, 1964.
- [4] 前野直彬(注解). 唐詩選. 岩波書店, 1961-1963, p.11.
- [5] 日野龍夫(校注). 唐詩選国字解 1. 平凡社, 1982, pp.12-16.
- [6] 大川忠三(著). 唐詩三百首. 明德出版社, 1984, pp.25-26.
- [7] 中島敏夫(編). 唐詩類苑. 汲古書院, 1990-1995.